兵庫県極楽寺蔵『六道絵』の〈絵語り〉

井上　泰

一　はじめに

兵庫県多可町極楽寺蔵『六道絵』は、十四世紀初頭、天台宗にかかわりの深い場で制作されたと考えられている。[*1] 全三幅の連幅画面には、上部右から左へ向かって十王が、画面下部に六道（右幅右に人道、右幅左・中幅・左幅右に地獄道、左幅左に下から畜生・餓鬼・修羅・天道までの各道）が描かれている。十王観と六道観を併せ描くいわゆる〝六道十王図〟に属する作だが、本図は、さらに追善供養によって悪道から母を救済する目連救母説話をも組み込んでおり（中幅最下部＝阿鼻城の門前での目連と母・青提との再会場面、左幅＝五道転輪王の左方、目連が盂蘭盆斎によって畜生道から母を救済する場面、人道に転生した母が忉利天へ昇天する場面）、この点に特色がある。

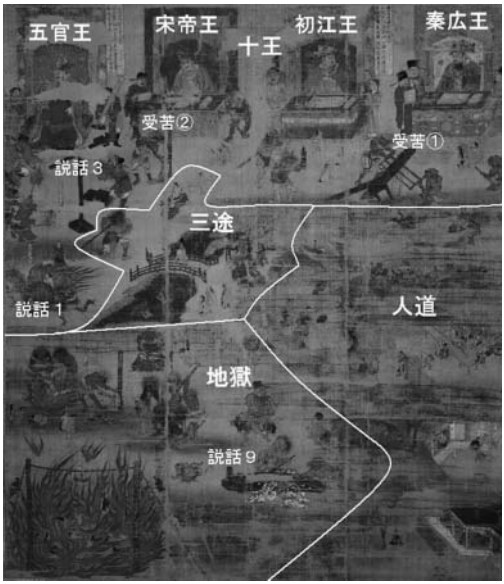
本『六道絵』の各絵相については、菅村亨「極楽寺本『六道絵』について」（『仏教芸術』一七五、毎日新聞社、一九八七年十一月）に詳しい紹介がある。また、本図の特徴である目連救母説話については、鷹巣純氏や渡浩一氏が論じている。[*2] しかし、本『六道絵』全体をどのように読むのかということについては、これまで論じられていない。十王図・六道図・目連救母説話の各絵相が相互にどのように結び付き、本『六道絵』が全体としてどのような物語を語り出しているのか（＝〈絵語り〉）は明らかになっていないのである。

立石和弘氏は物語絵研究の視座について次のように述べている。[*3]

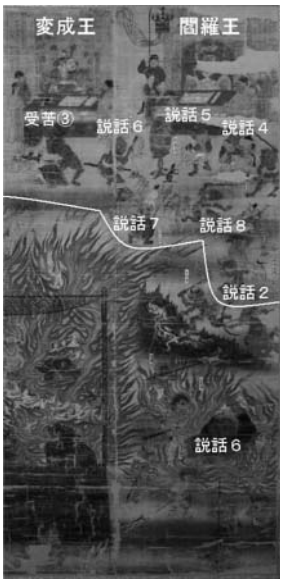
> 解釈という物語を絵画によって過剰に再生産するのではなく、むしろ逆に、物語絵の方法がどのようにして解釈を誘発するのかという視座によって、表象の編成と仕組みを捉え返そうと試みた。

本稿に用いる〈絵語り〉[*4] は立石氏と視座を共有している。指摘さ

〈右幅〉



〈中幅〉



れるように、典拠によって絵相を解釈したり、典拠がいかに絵画化されているのかを論じるのではなく、また、研究者の読みを絵画に投影するのではなく、むしろ、それらの解釈を誘発する「表象の編成と仕組み」を論じることが重要であろう。本稿でも、本『六道絵』各絵相の「表象の編成と仕組み」を分析し、その〈絵語り〉の全体を読み解きたい。

二　十王絵相の検討

1　十王観念の位相

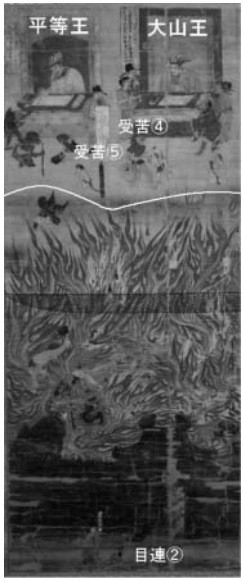
極楽寺蔵『六道絵』には、『預修十王生七経』（以下、十王経と略称）の讃が、各十王の左右いずれかに墨書されている。したがって、本図の十王絵相は十王経もしくはこれを絵画化した十王図に依拠したものと思われる。そこで、ここでは、我が国における十王経の享受と十王図の作例を概観し、本図の十王絵相の「編成と仕組み」がどのような位相にあるか確認する。

我が国における十王経の享受は、『江都督納言願文集』の願文に十王経に基づく記述が見られることから、天永二年（一一一一）にまで遡ることができる。

▼『江都督納言願文集』「天永二年五月日女弟子藤原敬白」

将企七日之善、以脱十王之譴。（中略）即以此詞注黒色之幢、

〈左幅〉



即以此誓銘頗梨之鏡。

『預修十王経』対応本文（大日本続蔵経第一巻）

・閻羅法王白仏言、世尊我等諸王、皆当発使、乗黒馬、把黒幢、著黒衣、検亡人家造何功徳、准名放牒、抽出罪人、不違誓願。（四〇一・中・九～十一）

・在生日、殺父害母、破斎破戒、殺猪牛羊鶏犬毒蛇一切重罪、応入地獄十劫五劫。若造此経及諸尊像、記在業鏡。閻羅歓喜、判放其人、生富貴家、免其罪過。（四〇〇・中・十七～十九）

また、『澄憲作文集』、『拾珠鈔』、『普通唱導集』、『烏亡問答鈔』の追善供養の説草本文中に十王経が引用されており、中世前期に、十王経に基づく十王観念が享受されていたことがわかる。

▼『澄憲作文集』（建久二年《一一九一》十二月十五日）

・夫尋五七日斉莚者　十王経云　五七閻王息静声　罪人心根未甘情　未来報策髪仰頭　著業鏡始先世事分明（以下略、第四十二五七日善）

・夫尋七々忌景者　十王経云　七々冥途中陰身　専求父母会情親福業此時仍未定　更看男女造何因（以下略、第四十三　七々日善）

・夫尋一周忌之作善者　十王経云　一年過此転苦辛　男女修斉福

業因　六道輪廻仍未定　造経造仏出迷津（以下略、第四十四　一周忌善）

▼『拾珠鈔』「姉小路大納言一周忌」（文永四年一二六七）

如一経説者、当一周忌、遇十王中第九都帝王裁断。猶是中有迷闇之位也。

▼『普通唱導集』（正安四年一三〇二）

秦広王　凡於人間一人命終之後、於初七日先依秦広王断罪、被定其業障之分斉。仏説預修十王経具説其事分明也。（下略）

▼『烏亡問答鈔』（十四世紀末～十五世紀前半）

已迎初七日景辰。彼披預修十王経、中陰毎七日、十王次第使亡者遺跡遣、没後造何功徳資汝、又犯罪障其ユクヘヲモ不知アルト令見之。或子孫旧僕有之、或親類骨肉有之、致懇志修追善、指其名、許罪人送浄刹。遺跡造罪業、悪業弥続狩遺悪道見。諸王遣使検亡人、男女修何功徳因。依名放出三途獄、免歴冥闇遭辛苦。今初七日則此勘刻之最初、秦広王断罪之正日也。其文云、一七亡人、中陰身、駆将墜之数如塵、旦向初王斉検点。由来未渡奈阿津、（下略）

本『六道絵』の十王絵相は、こうした院政・鎌倉前期における十王経およびそれに基づく十王観念の享受を背景に描かれているのである。

次に、そうした十王経およびそれに基づく十王観念の享受を背景に描かれた、中世前期「十王図」について概観する（制作年代の明確な文字資料を中心に挙例する）。それらは、以下に示すように、本地仏を描き込み、なかでも地蔵を重んじて地蔵信仰と習合したり、閻魔（本地・地蔵）、太山王（本地・薬師）を特化した十王観念に依拠したものが殆どであり、本地仏、習合、特化の表象をもたない極楽寺蔵『六道絵』の十王絵相とは異なっている。

まずは地蔵信仰との習合作例。

▼聖玄願文（建保二年一二一四）

弟子法橋上人位聖玄、暫慰哀素之意、泣述啓白之節詞。先師法印権大僧都大和尚位、当秋初中旬之節、告厚夜下泉之悲。一生有限、八〻六十四之寿筭云尽、再覲無期、七〻四十九之忌景已盈。与徒権襟慕之魂、不如翊菩提之因。是以奉図絵地蔵菩薩并十王像一舗、奉模写妙法蓮花経二部十六巻、無量義・観普賢・阿弥陀・般若心等経各二巻（下略）

▼『讃仏乗抄』第八（宗性〈一二〇二～九二〉編）

七箇日逆修善根事（中略）第五日
奉図地蔵菩薩像并十王像　奉写法華経第五巻　廻向六道衆生

次は本地地蔵の閻魔王（五七日）を特化した作例。

▼摂津仏光寺供養願文（嘉禎二年一二三六）
敬白／建立三重宝一基。第一重、奉造立安置釈迦如来・薬師如来・阿弥陀如来・弥勒并像一体、梵釈四王六天。第二重、奉書写安置五部大乗経各一部・浄土三部経・金光明経・仁王般若経、奉図絵釈迦八相儀・アミタ三尊光明像・アミタ来迎儀・九品浄土儀。第三重、奉造立安置地蔵并・舎利弗尊者・琰魔法王像各一体、奉図絵琰魔宮并十王像・六道衆生往生人等。建立三間四面堂舎一宇、（中略）／嘉禎二年十月　日　弟子沙弥敬白

こうした閻魔王の特化は以下のような閻魔信仰と関わっていよう。

▼『普通唱導集』（正安四年一三〇二）閻魔法王
於第五之七日者、殊以可致迷途之訪。謂其断罪閻魔法王也。於冥途者、其断罪併任閻王之心。仍以五七日、殊展仏事刷法莚者也。

特化される十王には七七日の審判王・太山（泰山）王もある（『十王讃嘆抄』泰山王〈建長六年一二五四〉、『普通唱導集』太山王）。その七七日を亡者の転生日とし、太山王による亡者救済を強調するのが福岡今津誓願寺本「十王図」である。今津誓願寺本「十王図」は、宋元仏画十王図を忠実に画いているが、[*6] そこでは、宋元仏画十王図において第三年五道転輪王（第十王）に配当される図像（救済される「士大夫」＝仏画の注文主＝施主）[*7] が七七日太山王に配当され、太山王による亡者（施主）救済が特化強調されているのである。

以上が、現段階で確認できる本『六道絵』成立以前、同時代の十王図絵相の典型例である。本『六道絵』はこれらとは異なり、本地仏や地蔵菩薩、閻魔宮が描かれず、閻魔王、太山王の特化も認められない。本『六道絵』十王絵相は、それらとは異なる十王観念をもって十王審判の〈絵語り〉を表象しているのであり、そこにその位相を指摘することができる。

2　受苦モティーフの描き込み

極楽寺蔵『六道絵』十王絵相の特色には、今ひとつ、十王経には記述のないモティーフが描かれている点がある。次にあげた各十王の面前での受苦絵相がそれである。

受苦①…秦広王・鋸で解体される

受苦②…宗帝王・口を槍で突かれる
受苦③…変成王・腕を潰される
受苦④…太山王・引き回される二亡者
受苦⑤…平等王・杭に繋がれ合掌する亡者
受苦⑥…五道転輪王・鉄臼でひかれる

これらの受苦絵相は、「いくつかの先行遺品からモチーフを借り」てきたものだとされる。[*8] その〝借用〟にかかわっては、中野照男氏の指摘が参考となる。[*9] 中野氏は、鎌倉時代に「浙江省の寧波で制作された宋元時代の十王図が請来され」たが、日本の十王図はそれらを「手本」としたという。現在知られている宋元仏画十王図系を分類すると、A～Eの五つの系統に分けることができる。[*10]

A　陸信忠筆奈良国立博物館蔵本、陸信忠筆善導寺本、陸信忠筆ベルリン東洋美術館本、江田家本（無款）
B　陸信忠筆永源寺本、陸信忠筆浄土寺本、陸信忠筆法然寺本、陸信忠筆称名寺本
C　神奈川県立博物館本（無款）、大徳寺本（無款）
D　京都誓願寺本（無款）
E　金処士（大受）筆ボストン美術館本、同メトロポリタン美術館本、宝福寺本

これらの宋元仏画十王図には、次のように、極楽寺蔵『六道絵』の受苦モティーフと重なるものを見出すことができる。

受苦①…鋸で解体される　→B系統
受苦②…口を槍で突かれる　→典拠不明（但し、類似例はある）
受苦③…腕を潰される　→A系統
受苦④…引き回される二亡者　→A、B、C系統
受苦⑤…杭に繋がれ合掌する亡者　→典拠不明
受苦⑥…鉄臼でひかれる　→D系統

松本浩一氏によれば、南宋時代には、「佛教式・道教式の葬送儀禮がかなり廣く行われるように」なり、「多くの知識人たちが佛教式・道教式の葬送儀禮に對して非難を加えて」いたようである。[*11] 車若水もそのような知識人の一人で、その著『脚気集』巻下（一二六八）には、彼らが批判する仏教式喪礼が具体的に述べられている。

自先王之礼不行、人心放恣、被釈氏乗虚而入、而冠礼喪礼葬礼祭礼、皆被他将蛮夷之法来奪了。（中略）喪礼則有所謂七次之説。謂人死後、遇第七日、其魂必経由一陰司、受許多苦。至於七七、過七箇陰司。又有百日、有三年、皆経陰司。本是欺罔、

愚夫惑其説。遇此時亦能記得父母、請僧追薦。謂之作功徳。
（下略）

ここでいう「七次之説」は、十王経に説く十王審判のことであろう。注目されるのは、「人死後、遇第七日、其魂必経由一陰司、受許多苦」という記述である。宋元仏画十王図の受苦モティーフは、車若水が伝えるこうした南宋における仏教言説の広がりの中で、「許多苦」を具体的に描きだしたものと考えられ、極楽寺蔵『六道絵』の受苦モティーフはこれを取り込んでいるのである。

このようにして、極楽寺蔵『六道絵』の受苦モティーフは宋元仏画十王図を典拠とすると判断される。同様に宋元仏画十王図の受苦モティーフを取り込んだ作例に、京都永観堂禅林寺本「十界図」がある。地蔵幅と阿弥陀幅の二幅からなる禅林寺本「十界図」では、地蔵幅、画面上部の十王と画面下部の悪道との間に宋元仏画十王図の受苦モティーフが次のように描かれている。

受苦ア…足を潰される　→典拠不明
受苦イ…獣の皮を着せられる　→C系統
受苦ウ…引き立てられる母親　→A・B・C系統

禅林寺本「十界図」は地蔵信仰と習合した十王観念に基づくもので、しかも受苦モティーフも極楽寺蔵『六道絵』のとは異なっている。これによれば、宋元仏画十王図は、我が国の十王（界）図の典拠として広範にかつ自在に用いられたといえそうである。

かくして、極楽寺蔵『六道絵』の十王絵相は、本地仏を描き込み、地蔵信仰と習合し、閻魔王・太山王を特化する十王観念に基づく十王図が量産される中、それらとは異なり、十王経に基づく各十王の審判の物語を絵語り、さらに宋元仏画十王図の受苦モティーフを描き込むことで各十王の面前での受苦の物語をも語り出すものとなっている。それは、中世前期の十王図のなかで特異な位置にある作品といえるだろう。

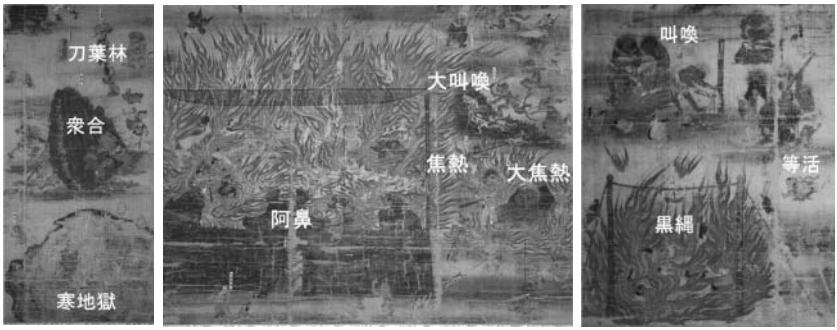
三　六道絵相の検討

極楽寺蔵『六道絵』連幅下部の六道絵相は、本図成立以前の地獄絵、六道絵、十界図にモティーフの一致を見出すことができる。例えば、中幅の阿鼻地獄のモティーフは、平安時代に制作された談山神社蔵「法華経金字塔曼荼羅」第一幅に見出だされる。また、『聞書集』、『金葉和歌集』、『弁乳母集』などの地獄絵を詠んだ和歌にも、本『六道絵』のモティーフと重なるものが多い。[*12]

そうした中で、本『六道絵』の六道絵相の特色として注目されるのが地獄道である。地獄道は、本『六道絵』連幅画面の中央に猛火の赤色をもって配置され、悪道のなかで特に際立っている。さら

に、地獄道の中では阿鼻地獄が最も強調され、中幅中央に大きく描かれたそれを軸に、右幅に等活地獄と黒縄地獄、叫喚地獄、左幅に衆合地獄と刀葉林を配するかたちで構成されている、それは、垂直構造をもって観念されている『往生要集』などの地獄とは大きく異なる。

こうした極楽寺蔵『六道絵』の六道絵相と類似しているものに、出光美術館本「十王地獄図」（一四世紀）がある。二幅からなる出光美術館本は、各幅画面上下を雲で仕切り、上部に十王、下部に地獄道を描く。地獄道には、『往生要集』の各大地獄の記事を概略して記した色紙形が貼られており、それによれば、本『六道絵』と同じく阿鼻地獄を中心に据え、その周囲に各地獄を反時計回りに並べていることがわかる（右幅右に大叫喚地獄と焦熱地獄、右幅左に大焦熱地獄と阿鼻地獄、左幅右に等活地獄と黒縄地獄、左幅左に衆合地獄と叫喚地獄）。[13]『往生要集』に依拠しながら構造を組み替えて絵画化しているわけだが、その構造が極楽寺蔵『六道絵』と同様に悪道の中で地獄道を特化し、しかも阿鼻地獄を中心に据えるものとなっている点、さらにそれが十王図と六道絵とを上下に併せ描く〝六道十王図〟において行われている点、両者の関連を窺わせて興味深い。ただし、出光美術館本「十王地獄図」には、本地仏、五道転輪王面前の士大夫（宋元仏画十王図モティーフ）を描くこと、各十王が両端から左幅右幅交互に内側に向けて配列されていることなど、本『六道



●右幅
・等活地獄
・黒縄地獄
・叫喚地獄

●中幅
・大叫喚地獄
・焦熱地獄
・大焦熱地獄
・阿鼻地獄

●左幅
・衆合地獄
・刀葉林

絵』との異なりもいくつか認められる。直接的な関係というよりは、六道（地獄）の絵画化に際して『往生要集』の垂直構造を解体し阿鼻地獄を特化する絵相様式があって、それがそれぞれの〝六道十王図〟の制作において参照、変奏されたと言うことであろう。[14]

さて、本『六道絵』は、この地獄道の場面でも九つの説話を描き込んでいる。全九例は以下の通りである。

	墨書（□は判読不能）	出典
説話1	唐幽州虞安良	三宝感応要略録巻上第九
説話2	高陸秦安義	三宝感応要略録巻下第九
説話3	宋武当寺沙門僧規	法苑珠林巻第八十三
説話4	清河□邪見女	不明
説話5	劉薩荷	釈門自鏡録巻上
説話6	阿輪闍国婆羅門	三宝感応要略録巻上第十九／私聚百因縁集巻第三
説話7	隋鷹揚郎将天水姜略	法苑珠林巻第六十四
説話8	なし	不明
説話9	周武帝	冥報記巻下

興味深いのは、これらの説話の内四話題が、宣陽門院の御願により成賢が建立した醍醐寺焔魔堂（貞応二年一二二三御堂供養、導師安居院聖覚）の壁絵にも描かれている点である。[15] 醍醐寺焔魔堂の壁絵の絵相を伝える『焔魔王堂絵銘』奥書には、貞応二年に、成賢が焔魔堂の「絵料」として「本書」から抄出したことが記されている。「本書」については不明だが、阿部美香氏は、「成賢が様々な材料を聚め編纂していたことは推測」できるとしている。[16] 極楽寺蔵『六道絵』の場合も、同様にして九つの説話が選ばれ描き込まれたのであろう。そしてその内の四例が醍醐寺焔魔堂壁絵と一致することとなった。このことは、本『六道絵』の六道絵相が、ある特定の六道絵に依拠したのではないことを伝えると同時に、既存説話モティーフを選択的に取り込むことでここにいたる間に制作された絵相（＝〈絵語り〉）を組み込みつつ、あらたな六道絵の物語を語り出していることをも教える。

四　極楽寺蔵『六道絵』の〈絵語り〉

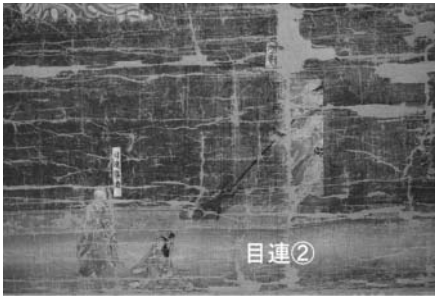
このように、極楽寺蔵『六道絵』は、十王経に基づく十王絵相に宋元仏画十王図の受苦モティーフを取り込んだ〝十王図〟と、地獄道、なかでも阿鼻地獄を特化して再構成された六道絵相に既存説話モティーフを選択的に組み込んだ〝六道絵〟とを合わせた、新たな〝六道十王図〟として制作されている。そして、冒頭でも述べたように、これに目連救母説話を描き込んでいるのが本『六道絵』なのだが、この目連救母説話表象の「編成と仕組み」は、本図

全体の〈絵語り〉を読み解く上で大きな示唆を与えている。

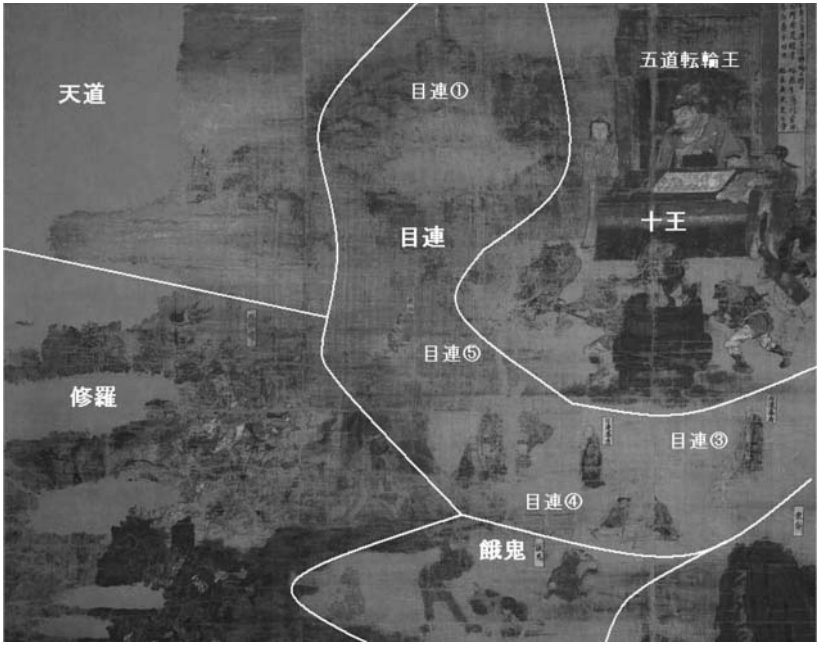
目連救母説話は、目連が悪道に堕ちた母を阿鼻地獄、餓鬼道、畜生道での追善供養によって救済し、以て人道に生まれた母が釈迦から「五百戒」を受け、忉利天に転生するという話である。目連救母説話は、『仏説盂蘭盆経』に依拠するものと『仏説目連救母経』[17]に依拠するものとがあるが、本『六道絵』の目連救母説話は、『仏説目連救母経』に依拠していると考えられている。[18]描かれている場面は、①母の堕地獄をめぐる釈迦への相談、②阿鼻地獄での母と再会、③狗身になった母との対面、④目連による盂蘭盆斎、⑤母・青提の忉利天への転生、の計五場面である。

目連救母説話に関しては鷹巣純氏、[19]渡浩一氏[20]に詳細な考察があり、目連救母説話の受容史の観点から、目連と母・青提との阿鼻地獄での再会場面に関する図像解釈が示されている。ここではそうした図像の極楽寺蔵『六道絵』における配置、他の絵相との関係に着目して、その「編成と仕組み」を検討してみたい。

まず、中幅下部、阿鼻城において目連が母・青提と再会する場面（場面②）を取り上げる。これは、第一義的には生前の作善、追善供養なき亡者の五道冥苦図像として読むことができるものである。先に述べたように、阿鼻地獄は、他の悪道よりも強い印象を与えるかたちで描かれ配置されている。その阿鼻地獄の底に描かれた青提堕地獄の場面は、生前の作善なき亡者、追善供養の得られない亡者受苦の恐ろしさを物語っている。しかし、重要なのはそこに目連が描かれている点だろう。この点に着目するならば、これは場面①「母の堕地獄をめぐる釈迦への相談」を経て目連が母を訪う場面、すなわち生者が亡者を弔う姿を描いた図像以外ではない。すなわち、それは目連救母説話の一齣として、追善供養の具体とその意義を説く図像だったのである。



次に、目連が狗身になった母と対面し、盂蘭盆斎によって母・青提を畜生道・餓鬼道から救済、その後母が忉利天へ転生する場面を見てみよう（場面③④⑤）。この場面は本図において畜生道・餓鬼道の上、天道の右に配置されている。つまり、話題内容と図様構成とが符合しているわけだが、さらに注目されるのは、それを五道転輪王の左方に描いている点である。五道転輪王は、十王経典で説かれているように、亡者の転生を決定する最後の王（三年忌）である。たとえば、『拾珠鈔』「大炊御門前右府禅門三年」表白（文応二年一二六一）では、十王経の讃を引用した後に三年忌追善が次のように促されている。



今日第三年之御忌ハ第十ノ五道転輪王断罪之日也。

好悪唯憑二福業因一。不善尚憂二トコソ千日内一。

不善之輩コソ千日之内尚跰二中有之冥路一事ニテ候ナレハ、宿善純熟之聖霊可三今経二歴十王断罪之庭一事、打任テハヨモ候ハシト覚候ヘトモ、謬テ猶留二穢土一、不レ図滞御ストモ二菩提ノ之覚路一、今日ハ決定生処定リ御スヘキ跡ニテ候ヘハ、如何ニモ々々ニモ可レ被レ奉レ訪候。

見られるように、三年忌は「五道転輪王断罪之日」。亡者の最終的な「生処」は追善供養の充足如何によりこの日に「決定」する。そうした五道転輪王審判場面の左、天道の右に描かれているのが目連の盂蘭盆斎による救済、青提の忉利天転生話題なのである。このような「編成と仕組み」は、自ずから、追善供養（＝盂蘭盆斎）の功徳としての五道転輪王による「決定生処」（＝〃忉利天転生〃）との読みを誘発するであろう。そうした読みを誘発する「編成と仕組み」をもって本図は絵語られているのである。

さて、目連救母説話の本図における「編成と仕組み」を右のように解釈し、これを極楽寺蔵『六道絵』全体の「編成と仕組み」のなかに差し戻すならば、それが十王観念の図像化（＝〈絵語り〉）の一部をなすものとして描き込まれていたことが了解される。

本『六道絵』は、連幅画面上部右端から十王を並べ、画面下部に地獄道を中心に右から左へ五道が描かれ、左上、第十王五道転輪王

の左方に天道が配置されている。先行研究では、右幅右下の人道は「誕生してから死後に死体が朽ち果てていくまでの人間の生涯として読み解けるように配列されている」とされる。[*21] また、人道の左横に描かれた三途は、人が死んでから初七日秦広王に至るまでの道程として描かれていると指摘されている。[*22] つまり、生苦、五盛陰苦、病苦、老苦に苦しみながら一生を終えた亡者が、三途河を渡り、十王のもとへ到るまでが連幅右幅に絵語られているというわけだが、そこから左に展開する〈絵語り〉は、十王審判の折々、生前の作善、生者追善の如何によって亡者が裁かれていく過程、あるものは生前作善・追善供養の功徳によって人天への転生を許され、あるものは生前悪業、生者追善の不履行の因をもって次王に送られて五道転輪王の最終審判に到る、その過程を語っているのであり、五道転輪王の左に天道が措かれるのは、この最終的な救済を図像化したものである。そしてそこに描き込まれたのが目連救母説話。それは、ここまでに絵語られてきた十王観念の内容を具体的な事例をもって再説する意義をになう。

このように見てくると、〝六道十王図〟として十王絵相、六道絵相を上下に併せ描く極楽寺蔵『六道絵』は、〝十王図〟の語りをこそ主文脈とし、地獄道を中心とした〝六道絵〟の語りを、生前作善・追善供養なき亡者の冥苦として、〝十王図〟の語りに組み込んだものというべきだろう。

五　おわりに

以上、極楽寺蔵『六道絵』の十王絵相、六道絵相を検討し、目連救母説話図像を含めた本図の「編成と仕組み」を考察しつつ、その〈絵語り〉の全体を読み解いてきた。本地仏、とくに地蔵信仰との習合や閻魔王・太山王を特化する「十王図」が量産されるなか、本『六道絵』はそれらと異なる、より十王経に忠実な十王観をもって十王絵相を描く。そして、それを主文脈に、十王審判による冥苦を地獄道、なかでも阿鼻地獄を前景化した六道絵相を画面下部に描いて生前作善・追善供養なき亡者の受苦を強調し、忌日追善供養による亡者救済功徳を目連救母説話の具体例をもって表象再説する。さらに、先に亡者生前の生涯を語るとした人道は、これを五道転輪王の最終審判による「決定生処」の一つとしての配置と見れば、本図の全体は、四苦八苦の人生を経て三途河を渡り、堕地獄の恐怖に怯えつつ各十王の審判を受け、再び人道へ転生していく輪廻転生の物語を、円環的な構図によって語り出しているともいえそうである。

極楽寺のある多可町に残る古文書（天保十一年（一八三九）の年記）には、「有馬慈心坊之筆六道之図三幅」とある。[*23] これにしたがって本図は従来「六道絵」と呼称されてきた。連幅中央の印象的な阿鼻地獄図像に惹かれてのことであろうが、その「編成と仕組み」は、むしろ「十王図」との呼称を求めているようでもある。

ところで、このような十王絵相を主文脈とする極楽寺蔵『六道絵』は、見たように、宋元仏画十王図の受苦モティーフ、「六道絵」の既存説話モティーフを選択的に取り込んでいる。それらは自ずから「十王図」を主文脈とする物語の傍らで、別の物語を語り出すだろう。前者は東アジアの冥界受苦の物語。後者は本朝伝来の仏教説話。それらは絵解きを通じて再演される物語だが、そうした再演をうながす「編成と仕組み」は本図制作者によって仕掛けられている。主文脈の物語の傍らで別の物語を語るテキストは、『十訓抄』や『平家物語』といった中世前期の文字テキストにも認められる。極楽寺蔵『六道絵』の〈絵語り〉はそうした語りとも関わり合いつつ生成したとおぼしいが、これについては稿をあらためて検討することとしたい。

【注】

*1　中野玄三『六道絵の研究』（一五五頁。淡交社、一九八九年刊）

*2　鷹巣純「目連救母説話図像と六道十王図」（『仏教芸術』二〇三、毎日新聞社、一九九二年七月）。渡浩一「串刺しの母 ―地獄図と目連救母説話―」（林雅彦編『生と死の図像学 ―アジアにおける生と死のコスモロジー』第四章所収、至文堂、二〇〇三年刊）

*3　立石和弘「源氏物語絵巻の境界表象」（八〇～八一頁。三田村雅子・河添房江編『源氏物語をいま読み解く1　描かれた源氏物語』、翰林書房、二〇〇六年刊）

*4　拙稿「〈絵語り〉論序説」（『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部第五五号、二〇〇六年三月、四六九頁～四八六頁）

*5　十王経は二種類ある。一つは『仏説預修十王生七経』で、もう一つは『仏説地蔵菩薩発心因縁十王経』である。『預修十王経』は、唐代に成立した偽経である。『預修十王経』は、生前に自身の死後の安楽を願って行う「預修斎」と、死後に肉親によって営まれる「追善斎」の二つを説く経典である。

*6　梶谷亮治「日本における十王図の成立と展開」（『仏教芸術』九七、毎日新聞社、一九七四年七月）の指摘に拠る。

*7　井手誠之輔「時空の旅人 ― 宋元仏画をめぐって ―」（『開館四十周年記念特別展宋元仏画』、神奈川県立歴史博物館、二〇〇七年刊）

十王図は、晩唐に中国で成立した偽経『預修十王経』にもとづく仏画で、生前に行われる逆修とよばれた生七斎や、亡者の追善供養に用い、六道輪廻の転生や地獄からの救済をはかり、極楽浄土への往生を願うために制作された。陸仲淵の十王図は、現在、三幅を残すのみであるが、最後の審判にあたる五道転輪王の画幅では、十王の背後の侍者が、「布施」と「念佛」を記録する帳簿をもっており、布施と阿弥陀如来の名号を唱える念仏の数の多寡が、この場合の審判を左右するらしい。向かって右側の老夫婦は、当時の高級官僚であった士大夫の姿である。また向かって左側の老夫婦は、「大乗妙法蓮華経」の題字が書かれた経典を奉献している。この仏画もまた、救済される人物が、念仏門徒であり、法華経の信者であることをしめし、延慶寺の念仏結社の会員であった可能性が高い。とりわけ、金大受筆の十六羅漢図（群馬県立近代美術館）、陸信忠の十王図、陸信忠筆の二組の十六羅漢図（京都・相国寺、米国・ボストン美術館）にも士大夫の姿がしばしば描きこまれており、科挙合格者を輩出した望族とよばれた寧波の名家が、こうした仏画の注文主として深く関わっていたことがわかる。

*8 菅村亨「極楽寺本『六道絵』について」（『仏教芸術』一七五、毎日新聞社、一九八七年十一月）

これらのモチーフは、他の地獄図あるいは鎌倉期以降数多く制作された十王図によく見られるものであるが、その配置、組み合わせの一致する遺品は見あたらない。また、それらにはあまり見られないものもある。一七日秦広王の前の、大鋸で亡者を挽く場面、三七日宋帝王の前の、鬼に追われる緋袴を着けただけの二人の女人と全裸の男がそれである。こうしてみるとこの十王図は、いくつかの先行遺品からモチーフを借り、それを自由に再構成したものと考えられる。

*9 中野照男『日本の美術』第三一三号「閻魔・十王像」（至文堂、一九九二年六月）

わが国では鎌倉時代以後に十王図が制作されている。浙江省の寧波で制作された宋元時代の十王図が請来され、これらに刺激を受けたらしい。日本の十王図はこれら中国画を手本としたが、中国の十王図とはっきりと異なる点は本地仏を表すことである。

*10 宋元仏画十王図の分類については、次の先行研究を参照した。前掲注9、中野照男『日本の美術』第三一三号「閻魔・十王像」。前掲注6、梶谷亮治「日本における十王図の成立と展開」。

*11 松本浩一『宋代の道教と民間信仰』（一九三頁。汲古書院、二〇〇六年刊）

この時代（＝南宋時代）には多くの知識人たちが仏教式・道教式の葬送儀礼に対して非難を加えている。しかしそのような非難の中に、かえってそれらの儀礼が、広く各階層に行われているようになってきていた事実を読みとることができる。

*12 『聞書集』二〇二、二〇三・二〇七・二〇九・二一三・二二四、『金葉和歌集』六四四、『弁乳母集』一五など。

*13 ただし、等活地獄や焦熱地獄、大焦熱地獄のモティーフは描かれておらず、モティーフを取捨選択している。

*14 現在、宋元時代に制作された十王図は、中国には残っていない。だが、宋元時代に中国で制作され、現在はハーバード大学に所蔵されている十王図がある。ハーバード大本十王図は、本地仏を描いておらず、本『六道絵』と同じく十王を等しく扱っている。また、画面下部には、審判を受ける亡者と地獄の責め苦が描かれており、本『六道絵』と構図が類似している。ハーバード大本十王図と本『六道絵』との直接的な影響関係はわからないが、本『六道絵』の位相を探るうえで、ハーバード大本十王図は重要な作品である。

*15 説話番号3・5・6・9。阿部美香「堕地獄と蘇生譚―醍醐寺焔魔堂絵銘を読む―」（『説話文学研究』第四十号、説話文学会、二〇〇五年七月）。壁絵の図像については、阿部美香「醍醐寺焔魔堂史料三題」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第一〇九集、国立歴史民俗博物館、二〇〇四年三月）で紹介されている『焔魔王堂絵銘』を参照した。

鷹巣純「出光美術館本　六道十王図に見る伝統と地域性」（『宗教民俗研究』第十六号、日本宗教民俗学研究会、二〇〇六年十二月）

*16 前掲注15、阿部美香「醍醐寺焔魔堂史料三題」。

*17 『仏説目連救母経』については、宮次男「目連救母説話とその絵画―目連救母経絵の出現に因んで―」（『美術研究』第二百五十五号、東京国立文化財研究所、一九六九年三月）を参照した。

*18 前掲注8、菅村亨「極楽寺本『六道絵』について」。ただし、渡浩一氏が指摘するように（前掲注2、渡浩一「串刺しの母―地獄図と目連救母説話―」）、本『六道絵』は、『仏説目連救母経』を単純に絵画化していない。

*19 前掲注2、鷹巣純「目連救母説話図像と六道十王図」。

*20 前掲注2、渡浩一「串刺しの母―地獄図と目連救母説話―」。

*21 富山県［立山博物館］開館十周年記念資料集『地獄遊覧―地獄草紙から

立山曼荼羅まで―』（八一頁。富山県［立山博物館］、二〇〇一年刊）

*22 前掲注8、菅村亨「極楽寺本『六道絵』について」。ただし、『地蔵十王経』によれば、「三途河」（葬頭河・奈河）は第一秦広王庁から第二初江王庁に赴く間にあるという（叡山文庫「十王絵巻上」〈端作、四〇・二八九、真如蔵〉等、参照）。

*23 八千代町史編纂委員会『八千代町史』近世史料編（その一）（八千代町役場、一九八四年刊）の中野間関係文書、「両旦中申合一礼の事」に記事がある。

※本文引用テキスト

○天台宗全書（天台宗典刊行会事務所刊）…拾珠鈔

○鎌倉遺文（東京堂出版刊）…聖玄願文、摂津仏光寺供養願文

○新纂大日本続蔵経（国書刊行会刊）…預修十王経

○真福寺善本叢書（臨川書店刊）…烏亡問答鈔

○文淵閣四庫全書電子版（人海人民出版社刊）…脚気集

○その他

・普通唱導集…『普通唱導集　翻刻・解説』（村山修一、法蔵館、二〇〇六年刊）

・讃仏乗抄…『校刊美術史料　寺院篇　下巻』（藤田経世編、中央公論美術出版、一九七六年刊）

・澄憲作文集…『中世文学の研究』（秋山虔編、東京大学出版会、一九七二年刊）

・江都督納言願文集…『江都督納言願文集』（平泉澄校勘、至文堂、一九二九年刊）

（付記1）脱稿後、出光美術館本「十王地獄図」（一四世紀）について、鷹巣純氏よりご論考「出光美術館本十王地獄図について」（科学研究費研究報告書、研究代表者宮治昭『交流と伝統の視点から見た仏教美術の研究―インドから日本まで―』、二〇〇八年五月）を頂戴した。そこでは、左幅と右幅を入れ替えて、八大熱地獄が右幅右から左幅左へと順に並ぶ絵相の可能性が指摘されている。この点については後考を期したい。

（付記2）本稿は平成二〇年度説話文学会大会（熊本大学・六月二九日）での発表をもとにしたものである。その際にご指導いただいた阿部泰郎・徳田和夫・渡浩一・錦仁の諸氏に御礼申し上げる。また、成稿に際して新たにハーバード大本「十王図」（注14）、叡山文庫本「十王絵巻上」（注22）を考察に入れたが、前者の図像の入手に際しては米倉迪夫氏、渡辺雅子氏の、後者文献の利用については小峯和明氏、宮腰直人氏のご高配を賜った。記して厚く御礼申し上げる。

（付記3）「六道絵」の調査及び掲載について極楽寺に格別のご高配をいただいた。この場を借りて厚く御礼申し上げる。

―いのうえ・やすし、広島大学大学院教育学研究科博士課程後期在学―